

伝統競技の文化変容に関する一考察

—伝統的舟競漕の変容—

安 富 俊 雄

はじめに

20世紀後半における高度経済成長や科学技術の進歩は人類がかつて経験したことのない速さで社会を急変させた。つまり、経済的豊かさを背景に、交通機関の発達や情報化の推進は我々が想像した以上のテンポで便利性に富んだ生活をもたらした。しかし人類が生活のなかで豊さを感じる一方で、その反動としてエネルギー問題や大気汚染などによる地球環境の悪化、そして人口急増による食料問題など単に一国だけで解決することが困難になり、地球規模で取り組まなければならない問題も生起・山積している。

以上のような急速な社会変動のなかで、我々の生活は都市化が顕著になり、人々が地域から流出し、長く地域社会を形成していたイエ・ムラの共同体が崩壊し、伝統的社会が消失しつつある。すなわち、青年層の流出により地域社会は大きな転換期を迎えている。したがって長く守り続けてきた地域の伝統行事も危機に瀕しており継承するにはいくつかの問題点を克服しなければならないなど、そのあり方について再考を迫られている。

ここでは、急速な社会変動によって地域伝統文化がどのように変容しているのか20世紀を中心に、とりわけ筆者がこれまでおこなってきた西日本水域の舟競漕調査（紀州、瀬戸内、壱岐・対馬、山口県）から舟競漕文化の変容について考えてみたい。

その場合、その基準となるのは、これまでの聞き取り調査、すなわち大正期、昭和初期との比較である。昭和初期は舟でいえば手動舟から動力船への移行が始まった時期であるが、全国的にはまだまだ手動舟主流の時代であった。同時に近代化が急速に進んだわけでもない。比較的日本的な伝統が色濃

く見える時代でもあった。

舟競漕をはじめとする祭礼競技は競争を目的とした儀礼（ゲーム）のため、変容の過程で自ずと近代スポーツの影響を受けてきたことは否めない。舟競漕がどのような影響を受け変容したのか社会組織・舟・競技形態を中心に述べる。

I スポーツと舟競漕の概略

1) わが国のスポーツ思想

スポーツは英国の貴族らによって楽しまれてきた遊戯が、18世紀後半から産業革命によって台頭した新興ブルジョアジー中心に担われ、合理化、競技化されて新しい競技に変容したものが、以後大英帝国の植民地主義と軌を一にして世界へ普及していった運動文化である。そして、当時起こったスポーツのアスレティズム思想は、時同じくして開国したわが国明治政府の文明開化政策の一環として移入され、英国のように地域にクラブをもたないわが国は、大学を中心とする学校体育に導入され普及していった。血気盛んな青年層に導入されたスポーツは学校対抗の形式で実施・普及されるようになり、自ずと競争主義（アスレティズム）がわが国にも定着するようになる。こうしてわが国ではスポーツの勝利至上主義化が浸透し、その後のスポーツのあり方に大きな影響を与えた。換言すれば、西洋に追いつけ追い越せを社会的背景として導入されたスポーツの勝利至上主義化は学校教育を中心に浸透していった。そして、オリンピックを頂点とする近代スポーツでは勝敗がそのスポーツと選手の存在価値を決めるまでになっていった。

ところが、今日ではスポーツも多様化の様相を呈しており、単にエリートだけがおこなう競技スポーツではなく”みんなのスポーツ”（Sports for all）が国際的に叫ばれるようになった。これは生涯学習、生涯教育に影響されて生涯スポーツが行政の政策の一環として取り入れられ、老若男女が幅広くスポーツを実施するようになってきていることを示している。そしてその勢いは徐々に大きくなりつつあり、これまでのわが国のスポーツ観を変えるまでになっている。

しかしながら、わが国のスポーツは先述したように勝利を至上の価値とする考え方がマスコミや学校の運動部などに依然として根強く残っており、それがスポーツに限らず伝統的な競技にも影響を与えている。社会の近代化、

合理化とともに伝統競技もその影が反映されている。つまり、伝統的競技にも競技形態等に近代スポーツの影響がみられ、濃淡はあるが、近代スポーツとほとんど変わらないものもある。

伝統的競技とスポーツを並列することに異論を唱える人がいる。それは当然のことかもしれない。しかし、スポーツと伝統的競技は多く共通点をもっている。近代スポーツもその源は祭礼競技にたんを発している。それが地域をこえ、国をこえて組織化、ルール化がはかられ形を整えて普及・拡大し、さらに国際化することによって今日にみるスポーツへと発展していった。アメリカの社会学者アレン・グートマンは現代スポーツの特徴について、世俗化、競争の機会と条件の平等化、役割の専門化、合理化、官僚的組織化、数量化、記録万能主義をあげている。¹⁾ たしかに国際化したスポーツが今日にいたるにはグートマンが指摘するように、ルールを変え、組織を拡大するといった道筋をたどってきた。同時に本来の文化が変容した。たとえば、柔道が今日では、オリンピック種目として国際化され、世界に定着するためには日本が考える本来の柔道の枠を越えて今あることを思えば想像できよう。そして今日では国際化して定着しているが柔道着のカラー化という問題が取り上げられ、圧倒的多数で採決されてしまった。これも「日本古来の柔道」とは異なるが国際化した種目はいたしかたない結末であろう。

このように、スポーツはオリンピック種目を中心とする近代スポーツ、国際化されずに国技として実施されている相撲やイギリスのクリケットのようなナショナルスポーツ、さらにその地域固有で統一したルールをもたず、しかも土俗的な信仰に基づいて実施される舟競漕などのバナキュラースポーツに大別されるとしている。²⁾ このバナキュラースポーツ（ゲームを含む）は世界中無数にあると考えてよい。繰り返しになるが、今日の近代スポーツも所詮はこれらバナキュラーのなかから発展したものと考えてよかろう。その意味では地域の独自性のある伝統競技もスポーツの一部と考えてよいと思われる。

2) 舟競漕の概略

近代スポーツであるボート競技は近代オリンピック大会が復興されて第2回大会である1900年（第1回大会は1896年）には早くも正式種目として採用された。

しかしいうまでもなく、それよりもっと古い歴史と伝統をもつボートレー

ス（以後、舟競漕と記す）が世界に広く分布している。特に東南アジア、中国の華中・華南地方は祭礼行事としておこなわれているところが多く、その影響を受けて、わが国でも沖縄のハーリー系、長崎のペーロン系の舟競漕がおこなわれている。また、わが国ではそれらとは別系の舟競漕が紀州・熊野、瀬戸内、壱岐・対馬、山口県沿岸部といった西日本水域でおこなわれている。これらの地域以外でも、海に面したところではおそらく実施されていたものと推察されるが、先にも述べたように昭和期に入ると近代化が進み、舟も手漕ぎ舟から機械船に変わるようになり徐々にその姿を消していった。そして現在おこなわれているところでも消滅の危機に瀕しているところが多い。

以上のような今日の状況を抱えながらも伝統文化を継承するため、様々な工夫がされているのが実情である。

①祭礼競技としての舟競漕

伝統的競技は主に祭礼時に神事の一つとしておこなわれてきた。それは神を慰め神に豊凶のお伺いをたてるための占い事であった。神意を伺うため人々は競技をおこなった。それは地域のなかでも年中行事の最大イベントであった。テレビ、ラジオのない時代、遊びの少ない時代では地域の人々の関心はその行事を中心に一年間の生活が営まれて来たと言っても過言ではない。

しかし今日では、都市化が顕著になり、伝統的な社会形態が崩れ、世俗化が進むなかで祭礼においてもその影響は大きく、神事や競技に対する意識・意欲が徐々に希薄になりつつある。したがって、競技においてはかつてのような迫力を見せるころは少なくなり、単なる形式的な儀礼に終わっているところも多々ある。

そのような現代社会において、伝統的な社会形態が他にくらべ比較的残っている漁村社会でも近年は漁業不振や都市化による産業構造の変化、加えて青年層の流出により伝統的祭礼の維持・継承が困難になり、転換を迫られている。つまり、祭礼を支える青年層の減少は祭礼競技にも深刻な影響を与えている。

舟競漕も例外でなく、信仰に根ざしたものから「見る」人を意識したイベント性の強いものに移行しつつある。そして、あるものは観客を意識し、マスコミを意識して現代化の道をたどり、儀礼を省略して従来より大きなイベントとして継承されているものもある。しかしそれは都市型の大きな祭礼である。地域で継承されている祭礼の多くは古式に則りつつも工夫をこらし、

ギリギリの選択を迫られながら中高年を中心に細々とおこなわれている。

このような社会変化のなかで、舟競漕がどのように変容・継承されているか社会組織、競技形態、舟等を中心にみていく。

II 舟競漕の変容

ではまず、今日の伝統的祭礼の一般的状況についてふれる。

今日では、祭礼日はかつての旧暦から新暦に変わり（しかし地方によっては旧暦のところもある）、しかも近年では日曜・祭日におこなっているところが多い。これはいうまでもなく祭礼に参加する人達（神事につかえる人と見る人）の便宜をはかるためであり、祭礼が神との儀式から単なる観客を意識した祭礼に変わったことを示している。

さらに参加者を意識したといえば、かつては頭屋をはじめ家とりやその長男だけで祭礼がおこなわれ、競技ももちろん家とりの長男だけであったものが、今日では青年層の減少により次男、三男はもとより青年誰でも、地域によっては他地域からの飛び込みの青年までも受け入れるようになった。その結果、閉鎖的なムラ共同体の伝統が崩れ、祭礼への参加機会の平等化がはかられ、地域共同体の民主化をもたらした。対馬の本戸-寄留制度がそのよい例である。⁴⁾

だが、このような地域の伝統の崩壊は同時に祭礼の儀礼の簡略化や省略化に拍車をかけることになり、頭屋をはじめとする祭礼を担う諸役のみそぎや別火の生活もほとんど見ることが出来なくなってきた。なかには島根県美保関のように現在も古式のままだに継承されているような例外もあるが、継承されてもみそぎの期間を短くして熊野二木島のように祭前一週間とか三日間実施しているところもある。

以上ようになってくると祭礼そのものが従来の意味や役割を失ってしまっているように思われる。

①競争をになう社会組織

競技といえば当然選手が必要になってくる。先にも述べるように、祭礼競技に参加できるのはその地区の青年であり、そのなかから選ばれる。したがって選ばれ神事に関わりをもてることは大変名誉なこととされた。競技は地区の対抗で、およそ地区を二つ東と西、上と下、海と山、浦と地（ざい）に分けて競技をおこなうことが多かった。しかも神意をおおぐ意味から結果によ

ては地区の命運に係わるることとして入念な準備をして競技に臨んだ。しかし熾烈な競技も喧嘩がたえないことなどから、徐々に縮小の方向に傾いたり、青年の減少によって地区選出は不可能になり、地区全体から（戦力の均等化）選ぶように変わっていった。そしてこの競技は神意を伺うというよりも地区の融和を重視するようになってきわめて儀礼的なものになり真剣な競技はあまり見られなくなった。さらに選ばれることが名誉であったものが地区青年の義務、そして強制されるようになっていった。よつて技術的鍛練は疎かになり、その練習期間も当然短縮され練習がおわれれば選手に飲食をさせて機嫌をとりながら実施されているのが実情である。

舟競漕がおこなわれるのは漁村とはかぎらない。対馬のように農業中心の地域でも祭礼や雨乞い行事として島のほぼ全域でおこなわれたところもある。今日では沖縄も同様であろう。しかし今日、西日本水域に残存する舟競漕の多くは漁村の祭礼行事としておこなわれている。古くは舟競漕が漁村社会の秩序立ての機能をはたしていた。つまり漁村社会ではタテ社会的系列が明確化している。15歳になれば一人前に数えられ若者宿とか青年宿といわれる合宿所で漁業、航海、大人としての教育を先輩たちから受ける。そして大人として祭礼への参加が許される。祭礼への参加が大人への通過儀礼となっている。漁村ではおよそ若者、若者頭、中老、大老といったタテ型年齢集団にわけて秩序を保った。したがって祭礼時も大老ら年配が主導権を握り、舟競漕の選手の選出も普段の仕事ぶりによって年配が決定した。そして大老らの厳しい監視のもと練習をおこないレースに臨んだ。しかし今はそれもない。

②競漕舟

競漕舟はかつては漁舟が使用された。つまり個人の舟主が豊漁や航海安全と神の御加護を期待して、先を争って競漕舟に選ばれることを願った。加えて舟主にとって競争に勝つことは名誉なことであるとともに自己の舟の優秀さを示すことになるために競争をエスカレートさせていった。つまり、まず軽い舟を建造し、勝つために選手たちを自宅に住ませ、賄いをして栄養をつけ、同時に禁欲をはかり、身を清めて士気の高揚をはかり、レースに臨んだ。そのため喧嘩がたえず、ところによればそれが競漕中止の引き金になったところもある。また、選手らを寝泊まりさせる間はすべてその費用は舟主によって賄われた。その費用は膨大な額にのぼった。

こうした舟主の荷重な負担と手漕ぎ舟の減少などにより、競技継承のため

競漕用の専用舟が建造されることになり、以後、経費は個人（舟主）の負担から自治会や氏子の公的負担へと変わっていった。それが今日まで維持されている。蛇足になるが、個人の経済的負担が重いのは頭屋も同様である。多大な負担を強いる神役をつとめるには経済的負担だけでも軽減しないと担い手はなくなってしまうだろう。当然祭礼は存続しなくなる。その意味では、祭礼費用は今日では氏子や自治会負担に変わっている地域が多い。競漕舟も氏子や自治会、行政組織が建造して継承につとめるところがほとんどである。しかしこの舟も祭礼以外では使用されていない。

なお、漁舟を使用していた時代はほとんどの地域で、その年の新造船を用いていた。新造船が速いということもあったようだ。また広島県東野町のように瀬戸内の造船業の盛んなところでは舟大工は腕のみせどころで競って舟をつくったところもある。

さらに対馬のように島全体が舟競漕が盛んなところでは地区対抗となると、地区内の競漕時よりも舟が大きくなり、長舟とか村舟という村所有の大型舟を使って競漕したところもある。対馬では村が競って大きな舟を造った。

③競技形態

次に競技形態をみると、まず第一に競漕の距離が何分の一かに短縮されたことである。数kmあったものが現在は数百mに短縮されている。これはなによりも漕力の減退が考えられる。競漕用漕具については、わが国では櫓、長櫂、短櫂が考えられる。特に日本的競漕具の代表である櫓については今日ほとんど使用されなくなったこと、しかも技術的に複雑なテクニックをようすることなどから急速に減少傾向にある。古老らによれば、今日では左右のバランスよい漕ぎ手のリズムが取れないため、舟がローリングしたり、直進しないなど、漕能力の低下は目をおおうばかりと嘆いていた。

長櫂は瀬戸内や紀伊・熊野川など比較的潮の流れの速いところで使用されていて、昔も今もさほど変化はないようだ。

短櫂はペーロン系の競漕舟をはじめ、東南アジア、中国などで広く用いられ、近年開催されはじめた競漕大会では特に多用されている。舟の型によって、漕ぎ方、櫂の長さも異なる。沖縄などでは昔ながらの水かき部分が細長い（柳葉）ものが用いられている。これは長崎のペーロンとは異なる。

さらに競技形態で興味深いことは古き中国の名残か「奪標」に似た形態がとられていたことである。これは比嘉政夫氏の報告にもあるように、⁹⁾ 香港

や沖縄で見られるものであるが、競漕舟が丘に乗り上げ、乗員が飛び下りて丘の旗を奪って勝敗を決しようとするものである。これは西日本でも筆者の調査によれば壱岐や山口県などでは行われていたようだ。しかし戦後、港湾開発がすすみ、浜に岸壁が設置され、それは不可能になった。したがって、現在は海上にゴールをつくってレースがおこなわれている。ちなみに、「奪標」の名残としてわが国では御幣や酒樽を用いたところもあったようだ。つまり、丘に駆け上がり旗の変わりに御幣や酒樽を奪って勝敗を決した。

また競漕も現在では、近代スポーツのボート競技のように横一線に並びスタートをきることが常識になっている。しかし以前は中国に見られるように（現在も中国では伝統的に継承されているところでは表演的なものが多い）表演的なレース、すなわち水上に浮かぶ数隻の舟のうち、二隻が横並びするとお互いが意識してレースを始めるといった形式のものであった。任意におこなわれ、相手も距離も決まっていなかった。

競漕舟も単なる競漕専用舟ではなく、御座舟の曳き舟、御神幸舟の一つとして役割を担いつつ競漕にも一役かって出たところが多い。和歌山県新宮・古座、三重県熊野・二木島、広島県東野、山口県須佐、長崎県壱岐・勝本などがそれで、勝本では競漕舟を御幸舟（みいきぶね）と呼んでいる。今ではこれらの舟は個人舟ではなくて専用舟になっている。もう一つ忘れてならないことは、近年では観衆を意識して沖から浜へとといった片道コースから往復コースをとるようになったところが多々ある。沖から浜とは沖縄のように海の彼方から神を運んで浜へやって来る意味をもっているが、信仰よりも観衆を意識したレースに変わり、しかも観衆が見やすい場所やコースでレースがおこなわれるようになった。近年とくに漕ぎ手減少もあって、距離の変更を余儀なくされ同時に観客にアピールする演出として場所の設定も考えられるようになった。

④乗員の減少と諸役の簡略化

地区に青年の多い時代には大勢のなかから、それぞれの役にふさわしい人を選んでしたが、今日では青年の数も少なくなり、選手の対象が青年から壮年まで年齢が上がってきた。したがって予備乗員が少ないばかりか乗員自体の絶対数が減ってきた。しかも櫓数が減り、競漕舟それ自体が小型化する傾向にある。

また、舳先に乗る女装の踊り子もところによっては省略されている。これ

は女装の存在自体が今日のレースとさほど関係がないために（もし道化役とするならば、見栄えをよくする意味で有意義）、近年復活したような”村起こし行事”などには登場しない。因島の權伝馬、対馬の全島舟グロー大会などがそれであろう。⁶⁾

さらに祭礼が変容するなかで、祭礼を構成する乗員の服装も急速に変化していった。つまり櫓舟では上半身裸で、下は褌、足袋をつける姿が徐々に変わり、Tシャツ、タンパンになり、長櫓では上半身は半纏、下は褌、足袋が褌のかわりにタンパンをはくようになった。

この他、櫓漕ぎ技術がむずかしいために継承者が減少し、祭礼競技としての舟競漕が困難になり、櫓から櫓に漕具を変えて競技を継承しているところもある。このように今日使われなくなった技術は徐々に消滅していく。

また長崎のペロン選手権大会のように、トーナメント方式がとられたり、地域の夏祭りではパフォーマンスとしての舟競漕であったり、水上のスポーツイベントとしての競漕に変わってきているところが多い。このように、昔の舟競漕の伝統を今日的なスポーツイベントに変えて名残りおしんでいるところなどさまざまである。

Ⅲ む す び

戦後の急激な社会変化について文化人類学者の青木保氏は「文化論的にみれば、戦後日本は、日本の伝統的な生活様式から価値観にいたる複合的全体が、この20世紀の「工業・都市文明」によって浸食され、変容しながらも、それを消化しあるいは同化しようとしてきた時代としてとらえられる」としている。³⁾

戦後の民主教育にはじまる「アメリカ化」は近代日本の西洋化に一層の拍車をかけた。それは明治期以後の脱亜入欧政策よりももっと速いテンポで近代化を推進させた。「アメリカ化」が強まるなかで、おりしも世界は1950年代より高度経済成長、さらに高度情報化社会への突入など急速な科学技術の進歩をもたらした。わが国はその恩恵を受けて経済大国にのしあがった。急速な社会変化は産業構造や社会構造にも大きな変化をもたらし同時にわれわれの生活様式にも大きな変化が現れるようになった。

このように戦後の50年は、それまでをはるかに凌ぐ勢いで変化し、われわれの社会・生活様式を質的に大きく変えていった。しかしながら都市化が促

進されるなかで、そのひずみを山村や離島などの周辺地域が受容することになり、過疎化や高齢化といった深刻な問題を抱えるようになった。そしてそれは周辺地域の存在に係わる問題に発展している。千葉徳爾は「文化は、その存在する地域条件に対応して住民が形成するものだから、地域の構造が変動するにつれて、文化そのものに変容がおこるのは当然である」とし、「文化変容は地域住民の生活条件なり、社会構造なりの変化によって著しく認められる場合が多い」としている。⁸⁾ したがって高度経済成長にともなう社会変化（諸現象）は当然のように地域伝統文化の継承にも大きな影響を与えている。

現に周辺地域の祭礼はほとんどが子どもと中高年層によって担われているのが実情である。先にも触れたように、伝統的社会ではその地域の秩序が保たれ、祭礼に係わるのは村の家取り衆といった閉鎖的な社会であったが、青年層の流出によりそれを維持するのが不可能になり、一部の人達で維持・管理していた祭礼が村全体で開催されるように変化した。そのため長く続いた閉鎖的なムラ秩序が伝統の継承のために崩れていった。このような典型的な状況が対馬全域でみられた。（対馬にかぎらず、伝統的祭礼を本家筋でもちまわりでおこなう伝統は全国にみられる）舟競漕も選手は本家の長男と限られていたものが今では誰でもに変わった。しかも地区を分けて対抗したため、その地区だけからの選出であったが現在では地域全体から選出し戦力バランスを考えて選手を割り振っている。したがって競技が形式的なものに変わり真剣な取り組みは見られなくなった。また世俗化により選手たちも信仰心が希薄になり、競技が祭礼のなかの単なる儀礼の一つとして参加するようになった。このようにみえてくると、周辺社会では世俗化にもよるが、青年層の流出により、祭礼をになう伝統的社会組織が崩壊したことが、祭礼変容の主因として考えられよう。

舟競漕は人一倍の体力を必要とするため誰でも参加できるものではない。加えて漕法（櫓）がむずかしいために今後継承は非常にむずかしい。しかし萩の弓ガ浜や熊野の二木島のように子どもに技術を継承させるために競漕大会を開催しているところもある。一方、ペーロン系の舟競漕は漕法も容易なこともあって「町おこし」的な海の行事には近年盛んに行われるようになった。これは長崎周辺でおこなわれてきたこともあるが、近年中国各地でスポーツ大会としておこなわれるようになったことも普及の要因であろう。

以上のことから、「豊かな社会」の到来とともに周辺地域の祭礼が自ずと変容する理由がご理解いただけよう。しかし周辺地域でも伝統的祭礼が維持・継承されているところもある。それはひとと経済力を兼ね備えたところである。したがって都市の伝統のある祭礼にはますますひとと資金が集まり、今までよりもさらに華美な飾り付けをして祭りをもりあげている。加えてスポーツ化の様相を色濃く反映し祭礼というよりスポーツ・イベントといった色彩を強めている。そして、これらはやがて神事色をなくしスポーツ・イベントとして成立していくのだろうか。現在でも伝統的祭礼のなかに競技がその祭礼のシンボルとなっているものを多く見る。特に長崎や中国にみるペロン系の舟競漕では今日その傾向が強い。神事性は薄らいでも、このような形で競技が継続・継承されることは喜ばしいことかもしれない。

世俗化がすすむなかで、わが国の伝統競技はますます魅力を失い徐々にその姿を消しつつある。その意味では日本の伝統文化は岐路に指しかかっているのかもしれない。これまで築いてきた文化のアイデンティティを失い掛けているのかもしれない。青木保は「どれほど「現代文明」による変化を受けようとも、また戦後日本をおそった最大の外部による変化である「アメリカ化」を実際の生活形態が示していようとも、日本人であることと、その「文化」の「連続性」と「持続性」とは変わらないとの強い気持が存在する。その気持が拠り所とするものは、「日本文化」の存続であり、すなわち日本人としての全体的な「まとまり」の核を形づくるものが確固としてあるという意識である。」と述べている。³⁾時代の推移とともに、祭礼の変容はいたしかたないとしても、その中核をなす祭礼としての儀礼は失いたくないものである。しかし、今日では、単なる厳粛さだけでは祭礼は継承されるように思う。その中に、競技のようなシンボル化された部分が必要である。ことばを換えれば、世俗化がすすむ現代では、伝統的祭礼はシンボル化された部分を持たずして継承されることは困難である。

注および引用文献

- 1) A. ゲートマン、清水哲男訳『スポーツと現代アメリカ』 TBSブリタニカ 1981
- 2) 岸野雄三編著『体育史講義』 大修館書店 1986
- 3) 青木 保『「日本文化論」の変容』 中央公論社 1990
- 4) 拙稿「対馬の舟競漕・その1」『地域文化研究8』 梅光女学院大学 1992

- 5) 拙稿「二木島祭」『地域文化研究10』梅光女学院大学 1994
- 6) 拙稿「対馬の舟競漕・その2」『地域文化研究9』梅光女学院大学 1993
- 7) 拙稿「東野町權伝馬」『地域文化研究12』梅光女学院大学 1996
- 8) 千葉徳爾『地域と民俗文化』大明堂 1977
- 9) 比嘉政夫「爬龍船考」『沖縄文化研究』16、法政大学沖縄文化研究所 1990